

聖書：ローマ 2：1～5

説教題：悔い改めに導く神の慈愛

日時：2015年4月26日

2章では語りかけられている人は1章後半と違う人にスイッチします。「ですから、すべて他人をさばく人よ。」このように語りかけられているのは誰でしょうか。1章では被造物において示されている神の啓示を退け、偶像礼拝、性的不道德、様々な社会的悪へと突っ走っている人々のことが語られました。一言で言って、それは異邦人です。それに対して2章で問題にされているのは、それを見てさばく人たちです。「アーメン！確かに異邦人は罪深く、さばかれて当然である！」と語る人たち。それは誰でしょうか。それはユダヤ人です。この後、17節からの部分ではっきりします。「もし、あなたが自分をユダヤ人となえ、云々」。パウロはそのことを最初からはっきりとは示さずに、これからのことを語ります。そして話が進む中で、対象としていたのはユダヤ人であることを明らかにして行くのです。こうしてパウロは異邦人もユダヤ人も神の怒りの下にあること、そしてどちらの人間もイエス・キリストを信じる信仰による義が必要であることを語って行くのです。もちろん私たちは、自分はユダヤ人ではないから、この箇所は私に関係ないと思うべきではありません。これは他人をさばく傾向のあるすべての人に当てはまる御言葉として読んで行く必要があるでしょう。

まずパウロが言っていることは、あなたは他人をさばくことによって自分自身を罪に定めているということです。なぜならさばくあなたが、それと同じことを行なっているからということです。果たしてユダヤ人は異邦人と同じ罪を犯していたのでしょうか。2章17節からの部分では明らかにユダヤ人のことが語られていますが、21～23節にはこうあります。「どうして、人を教えながら、自分自身を教えないのですか。盗むなど説きながら、自分は盗むのですか。姦淫するなど言いながら、自分は姦淫するのですか。偶像を忌みきらいながら、自分は神殿の物をかすめるのですか。律法を誇りとしているあなたが、どうして律法に違反して、神を侮るのですか。」ユダヤ人は、神の律法を持っていると誇り、それによって異邦人を断罪しながら、自分たちがその戒めを破っていました。確かにその破り方は異邦人と同じ仕方ではなかったでしょう。しかし彼らも、神の律法を破っているという事実には変わりがなかったのです。なのに彼らは人の罪だけ批判していた。律法を自分たちに当てはめるのではなく、人にだけ当てはめていた。人の中にある過ちを見つけることには熱心でしたが、自分の中にある罪は見ようとしなかった。マタイ7章3～4節：「なぜあなたは、兄弟の目の中の

ちりに目をつけるが、自分の目の中の梁には気がつかないのですか。兄弟に向かって、『あなたの目のちりを取らせてください』などどうして言うのですか。見なさい。自分の目には梁があるではありませんか。』

聖書の実例として、すぐ思い浮かぶのはダビデのケースでしょう。Ⅱサムエル記 11～12 章に記されていますが、国が戦いに出ている間に、ダビデは一人の女性に目を留め、王の権威を使って召し入れ、姦淫の罪を犯します。そしてこのことが発覚するのを恐れて、その夫を戦いの最前線に出すように命令して戦死させます。この罪を悟らせるために、預言者ナタンが遣わされ、ダビデに一つの話をして聞かせます。すなわち一人の富んでいた人は多くの羊と牛の群れを持っていたが、自分のところに来た客をもてなすために、一頭しか羊を持っていない貧しい人からそれを取り上げて調理した。ダビデはこれを聞いて激しい怒りを燃やし、「主は生きておられる。そんなことをした男は死刑だ。」と叫びます。すると預言者ナタンはすかさずダビデに言います。「あなたがその男です。」私たちが人のことを色々批判し、論じることができるかもしれませんが、「あなたがその男です」「あなたがその女です」「あなた自身が同じことをやっています」と神から言われることはないでしょうか。

なぜ私たちは人の罪は指摘しつつも、自分が同じことをしていることには気付かないのでしょうか。それは一言で言って罪の力です。罪は物事を自分に有利に、自分に都合が良いように見させます。その結果、多くの人々は自分は罪人ではないと考えます。人々は言います。「私より悪いことをしている人はたくさんいる。」「私は少なくともテレビで報道されるような犯罪を行なう罪人とは違う」と。本当にそうでしょうか。たとえばしばらく前に食材偽装や産地偽装、消費期限偽装などの問題がありました。あるいは耐震工事偽装、最近では免震ゴム偽装もありました。明らかに責められるべき罪です。しかし私たちは自分は全く潔白な人間であるかのような態度で、その人たちを非難することができるのでしょうか。私たちは嘘をついたことがないのでしょいか。偽りの証言をしたことは一度もないのでしょうか。自分に都合よく事を運ぶために、真理に目をつぶったことはないのでしょうか。また様々な不倫騒動や性的犯罪も良く報道されます。私たちはそのことで新聞に載るようなことは確かにしていません。しかし同じ性質のことを少しもしていません。イエス様は言われました。「だれでも情欲を抱いて女を見る者は、すでに心の中で姦淫を犯したのです。」また私たちは様々な殺人事件の報道も聞きます。それらはあつてはならないひどいことです。しかし誰かを憎み、その人はいない方が良くと思ひ、さらにはバカにする言葉を口にするのは神の御前ではその人を殺しているに等しいとイエス様は言われま

した。また多くの人は何億円もの強盗を試みたり、路上で引ったくりをしたり、置き引きをしたことはないかもしれません。しかし何かを請求したり、支払う際に、多少ごまかして自分に都合が良くなるようにしたことはないでしょうか。おつりを多くもらったことに気づきながら、そのままポケットに入れたことはないでしょうか。人から借りたもので返さないままにしているものはないでしょうか。それに気づいているのに、放置していることはないでしょうか。それは立派な盗みではないでしょうか。

私たちはこのように、他の人のある罪を指摘しながら、実は他の方法で自分も同じことをしているのです。なのに私はあの人のようにはやっていないから、さばかれるはずはないと勝手に考えている。しかしそうは行きません。2節に「神のさばきは正しい」とあります。あの人がこれこれの罪でさばかるとしたら、それと同じことをしている私も当然同じようにさばかれるのです。11節にありますように、神にはえこひいきなどないのです。

このことを知ったなら、私たちはやがて自分に臨むであろうさばきを思って打ち震えて当然です。ところが人間はなお、自分は神のさばきを免れるだろうと考えがちであることが3節に述べられています。どうして私たちはそのように考えるのでしょうか。3～4節：「そのようなことをしている人々をさばきながら、自分で同じことをしている人よ。あなたは、自分は神のさばきを免れるのだとでも思っているのですか。それとも、神の慈愛があなたを悔い改めに導くことも知らないで、その豊かな慈愛と忍耐と寛容とを軽んじているのですか。」

さばきのメッセージを聞いても、世の多くの人はこう考えるでしょう。確かに悪はさばかれなければならないだろうが、神がこの私の小さな罪を取り上げて、それをさばくというのはありそうにないことである。なぜなら色々な悪があった世界もこれまで長い間、何事もなく保たれて来た。また私の生涯を振り返っても、確かに悪さをしたこともあったが、特別さばかれずにここまで生きて来た。もし神がおられて、悪をしつかりさばく方なら、もっと前に私はそのようにされていただろう。しかし人生色々ありながら、ここまで私は来たのだから、神がいるとしても、これまで同様、これからも私を受け入れ、良きに導いてくださるに違いない、と。しかしパウロはここで、それは大きな勘違いであると言っています。神がこれまで決定的なさばきを下していないのは、神のさばきがないからではない。あるいは神が私の生き方を賞賛しているからではない。それはむしろ神の豊かな「慈愛」と「忍耐」と「寛容」との現れであるということです。すなわち神はすぐにでもふさわしいさばきを下して良いはずなのですが、私たちが悔い改めに進むようにと、時を伸ばしてチャンスをくださっている。

そのことをあなたは軽んじているのですか、とパウロは言っています。

このことで思い起こすのは、ルカの福音書 13 章でシロアムの塔が倒れ落ちて 18 人が死んだ事件についてイエス様が語っているメッセージです。当時の人々は、この出来事にショックを受けて、こう問うたようです。なぜシロアムの塔はあの 18 人の上に倒れ落ちたのか。あの 18 人は特別に罪深い人たちだったのか。しかしイエス様は、そうでないと言われました。そして言われました。「あなたがたも悔い改めないなら、みな同じように滅びます。」すなわちイエス様は、彼らの質問が間違った土台に立っていることを指摘されたのです。人々はなぜシロアムの塔が彼らの上に落ちたのかと問いましたが、イエス様によれば、本来不思議に思っただけで問うべきは、「なぜあの塔は私の上に落ちなかったのか」ということであるべきである。本来、私たちはただちに神にさばかれて当然の者たちです。今すぐシロアムの塔が私の上に崩れ落ちて来ても当然の者たちです。ですからもし問うなら、「なぜあれは私の上に落ちなかったのでしょうか」「なぜ私は今日も生かされているのでしょうか」というものであるべきである。私たちはいつしか自分の上にある神の慈愛と忍耐と寛容を当然のもののようか、間違っただけで問いを発してしまうのです。ですから朝、布団から目を覚ました時、私たちは問うべきです。なぜ私は今日もこのように生かされているのだろうか。このように罪深い者をなぜあなたは今日も支え、地上の生を許してくださっているのでしょうか、と。その驚きと感謝から、神の御心にかなう歩みへ、すなわち悔い改めの歩みへ進まなくてはなりません。もしそのことをしないなら、5 節にあるように、私たちは神の御怒りを自分のために積み上げていることになります。聖書は世界の歴史の最後に、一人一人が神の前に立たされて、地上の行ないについて審判を受けると語っています。その日まであわれみを受けた者であればあるほど、神の慈愛と忍耐と寛容を受けた者であればあるほど、それを無視し、軽んじて過ごした者には一層厳しいさばきが臨むことになるのです。

私たちは今日の御言葉を聞いてどうしたら良いのでしょうか。それは 4 節とは反対に、私の上に今日もある神の豊かな慈愛と忍耐と寛容とを良く考え、正しく評価し、この神のお心に応答する歩みをするのでしよう。Ⅱペテロ 3 章 9 節：「主は、ある人たちがおそいと思っているように、その約束のことを遅らせておられるのではありません。かえって、あなたがたに対して忍耐深くあられるのであって、ひとりでも滅びることを望まず、すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられるのです。」15 節：「また、私たちの主の忍耐は救いであると考えなさい。」主が直ちにさばきを下さずに忍耐くださっている今の時は、私たちにとってかけがえのない救いの時と考え、最大

限にこの機会を用いなさい、ということです。あとから後悔したのでは遅過ぎる、非常に貴重な期間を私たちは今、与えられているのです。

この神の慈愛を正しく受け止めて、私たちは神が願っておられるように、悔い改めの歩みへ進みたいと思います。悔い改めと言っても、自分で自分の悪いところを全部直して神の前に戻って来るということではありません。そのようにできない私たちのために、神は救い主イエス・キリストを送ってくださいました。求められている悔い改めは、このイエス・キリストにあつて悔い改めることです。キリストにより頼むこととセットで悔い改めることです。その時、私たちは自分では処理し切れない途方もない罪を全部キリストの十字架によって赦していただくことができます。そしてキリストと結ばれてキリストの完全な義をいただく者となり、またキリストの力をいただいて、真の意味での悔い改めの生活、すなわち神の御心にかなう正しい歩みへの立ち返りができるのです。この貴重な時を生かして、神が差し出してくださっているキリストのもとへ行くこと、そしてその方のもとで真の悔い改めと救いの祝福に生きること。それこそ神の豊かな慈愛と忍耐と寛容に心から感謝し、この神のお心に応える神に喜ばれる歩み方なのです。